

〈論 文〉

## 大品系般若経における四種菩薩について

### Four Kinds of Bodhisattva in the *Larger Prajñāpāramitā*

鈴木 健 太

Kenta SUZUKI

#### 1. はじめに

大乘仏教において、通常、仏陀になることを志した修行者は「菩薩」と呼ばれる。しかし、菩薩の中には修行を始めたばかりの者もいれば、修行完成間近の者もいる。この点について、菩薩の修行の到達度を段階別に示す「階位（地）」という考え方が次第に発達していった。従来、こうした「階位」のうち大乘経典における最初期のものが小品系の般若経に見られるとされてきた。すなわち、小品系には「初発心」「久修習」「不退転」「一生補処」の四種の菩薩の階位が見られるという見解が示されてきたのである<sup>1)</sup>。

しかし、こうした見方には問題が無いわけではない。本稿では、四種菩薩のうち三種が、小品系においては階位としてまだ確立していなかったということをまずは確認し、そのうえで、小品系が発展して成立したと見なされている大品系の般若経において、残りの三種も階位として位置付けられるようになったことを示していきたい。

## 2. 小品系般若経における四種菩薩

### 2-1. 小品系般若経における四種菩薩登場箇所

まずは、小品系における四種菩薩の用例を確認しておきたい。四種菩薩がまとまって登場するのは以下に紹介する箇所のみである。

該当箇所に至るまでの話の流れを整理すると、まず、シャクラ（帝釈天）が発心した菩薩の願いが成就することを願っていることを世尊に告げる。シャクラは次に、菩薩摩訶薩が退転しないということを確認していることを表明し、その理由を述べる。続いて、次に示すように、菩薩の発心や、菩薩の不退転の本質、一生補処の本質に随喜することに多くの功德があるかどうか、仏陀（世尊）に質問する。それに対して仏陀は、多くの功德が得られることを説く。

すると、神々の主シャクラは、…（略）…次のような言葉を述べた。

「……世尊よ、それら諸々の新たに乘に進み入った（**初発心**）菩薩摩訶薩の発心を随喜して、〔諸々の菩薩行を行じている（**久修習**）菩薩摩訶薩の発心をも随喜して、〕諸々の**不退転**菩薩摩訶薩の不退転の本質をも随喜して、諸々の**一生補処**菩薩摩訶薩の一生補処の本質をも随喜する善男子や善女人は、世尊よ、どれほど多くの功德を得るでしょうか」<sup>2)</sup>

このように言われて、世尊は神々の主シャクラに次のように言った。

「カウシカよ、山の王スメールを藁の先端で量るならば、量を把握することができるかもしれない。しかし、カウシカよ、菩薩摩訶薩であるその善男子あるいは善女人の随喜を伴う発心の功德の量を把握することは決してできない。…（略）…」<sup>3)</sup>

この後、シャクラは、菩薩摩訶薩の発心を随喜しなければならないことを述べ、仏陀もその意見に同意する。

さて、今紹介した文章の下線部が四種菩薩に関する記述である。大乘仏教における最初期の菩薩の階位を示すものとして多くの研究者の注目を集めてきた箇所であるが、ここで四種菩薩の内容を説明しているわけではなく、この文脈の中で四種菩薩が重要な意味をもっているわけではない<sup>4)</sup>。

## 2-2. 小品系般若経における四種菩薩と「階位」

この小品系の四種菩薩は、しばしば「四階位」と称されてきたが、四種すべてを「階位」と呼ぶのは実は適切ではない。「階位」と呼ぶうのは「不退転」のみである<sup>5)</sup>。その理由は以下の通りである。

- ①通常、「階位（地）」という言葉は「bhūmi」の訳語として用いられているが、前節で示した四種菩薩がまとめて登場する箇所において「bhūmi」およびそれに相当する語は見られない。また、小品系のその他の箇所を含めても、四種菩薩のうち「bhūmi」に相当する語が共に用いられているのは、「不退転」のみである<sup>6)</sup>。
- ②「初発心」「久修習」は、他の箇所でも「不退転」との比較で語られることが多い。（なお、「一生補処」の用例は前節で示した箇所のみだけである）
- ③前節で示した四種菩薩を列挙する箇所以外にも、様々な修行の進展度合いの菩薩を列挙する箇所がある<sup>7)</sup>。そのような場所でも「不退転」は挙げられているが、他の三種は明確には示されていない。

④四種菩薩間で記述の量に大きな差がある。「不退転」の記述が圧倒的多く、章題にもなっている<sup>8)</sup>。

⑤「不退転」以外の三菩薩は、諸異訳間でも、同一のヴァージョン内でも用語が安定していない。(例えば、第一の菩薩は梵文『八千頌』では「新たに乘に進み入った者 (prathamayāna-samprasthita)」となっているが、漢訳の諸異訳は「初発心／初発意／新発意 (prathamacittotpādika に相当)」となっている。また、第二の菩薩は『仏母』では「久修習」、『大般若』では「久発心修諸勝行」、『小品』では「行六波羅蜜」、『大明度』、『道行』では「随次第上」となっており、表現に差異がある。また、梵文写本でも「bodhisattvacaryām carat」や「caryāpratipanna」といった表記が見られ、一つに定まっていない<sup>9)</sup>。さらに、第四の菩薩は『道行』では「阿惟顔 (abhiṣeka に相当)」となっているが、他の訳では「一生補処 (ekajātipratibaddha に相当)」及びそれに類する語となっている。)

①で示したように、小品系においては「不退転」のみが「階位」という言葉と直接的に結びついている。また、②～⑤から、他の三種よりも「不退転」は、菩薩の修行の到達段階として、明確になっていたことが分かる。

これらを踏まえて、小品系の四種菩薩を位置づけなおすならば、それらは「不退転の階位に到達している菩薩＝不退転菩薩」と、「不退転の階位への到達には程遠い菩薩＝初発心菩薩」、「不退転の階位にもうすぐ到達しそうな菩薩＝久修習菩薩」、「既に不退転の階位に到達してほどなく仏陀になる菩薩＝一生補処菩薩」というように、不退転の階位との距離を示すものだったと考えられる。

だとすると、「般若経の四種の階位は、大乘仏教のもっとも古い階位説」<sup>10)</sup> というよりも、「般若経の不退転菩薩の階位は、大乘仏教の最も古い階位説」もしくは「般若経の四種の菩薩は、大乘仏教の階位説の萌芽」と捉える方が適切なのではないだろうか。

### 3. 大品系般若経における四種菩薩

このように、小品系では明確な階位は「不退転」のみであったが、先行研究で既に明らかにされているように<sup>11)</sup>、大品系では、四種菩薩がまとまって登場する箇所<sup>12)</sup>に続く部分で「初発心」や「一生補処／阿惟顔」を階位と見なす表現がなされており、それらも階位として認められていたことが分かる。以下に、諸異訳における該当する文章を確認していきたい。(なお、次章で述べるように大品系では十地説が説かれており、以下の引用文でも四種菩薩は十地と関係づけて説明されている。)

#### ①『放光』(102a11-17)

発是代歡喜意者得至仏国供養諸仏。所以者何。阿僧祇人初發意作功德代歡喜故。從初發意菩薩至于十住阿惟顔菩薩所作功德皆代其歡喜，持是功德疾近阿耨多羅三耶三菩，成阿惟三仏已，無央數不可説阿僧祇衆生皆當得度。

『放光』では、先に「初發意(初發心)」「久發意(久修習)」「阿惟越致(不退転)」「一生補処」の四種を列挙した(101c22-27)後、続くこの箇所では「初發意(初發心)」から始まり第十住の「阿惟顔」に至ることが説かれている。なお、『放光』における「十住」は、諸異訳における「十地」に相当する<sup>13)</sup>。同じ文脈の中で「一生補処」と「阿惟顔」が混用されている理由は明確ではないが<sup>14)</sup>、「初發意」から始まる一連の菩薩群を十の階位の中に位置づけようとしたと解される。

②『大品』(359a3-9)

善男子善女人為無量阿僧祇初發意菩薩諸善根隨喜迴向，為無量阿僧祇第二地第三地乃至第十地一生補處諸菩薩摩訶薩善根隨喜迴向阿耨多羅三藐三菩提，以是善根因緣故疾近阿耨多羅三藐三菩提。是諸菩薩得阿耨多羅三藐三菩提已，度無量無邊阿僧祇衆生。

『大品』では、「一生補處」が第十地に明確に位置づけられており、「初發意（初發心）」も初地に位置づけられていると解される。つまり、これらの菩薩は、それぞれ十地の中の一つの階位として捉えられているのである。

③『大般若』(302b18-27)

是諸有情能於無數最初發心菩薩摩訶薩功德善根深心隨喜迴向無上正等菩提，能於無數已住初地乃至十地菩薩摩訶薩功德善根深心隨喜迴向無上正等菩提，能於無數一生所繫菩薩摩訶薩功德善根深心隨喜迴向無上正等菩提。由此因緣，是諸有情善根增進，速証無上正等菩提，既証無上正等菩提，能盡未來如實利樂無量無數無邊有情，令住無余般涅槃界。

『大般若』では、『大品』や『放光』と異なり、「初發心」が初地の前に置かれ、「一生所繫（一生補處）」が十地の後ろに置かれており、それらが十地の中の階位に対応させられていない。

④蔵訳『二万五千頌（経）』(Thi 237b6-8)

kau shi ka de ni 'di ltar rigs kyi bu dang/ rigs kyi bu mo de dag gis byang chub sems dpa' sems dpa' chen po theg pa la gsar du zhugs pa dang/ spyod pa la zhugs pa dang/ phyir mi ldog pa dang/ skye ba gcig gis thogs pa/ tshad med grangs med/ dpag tu med pa rnams kyis dge ba'i

rtsa ba de dag la rjes su yi rang bar byas pa'i phyir te/ dge ba'i rtsa ba de  
dag gis rnam par 'phel bas/ bla na med pa yang dag par rdzogs pa'i byang  
chub tu nye bar gyur pa yin te/

チベット大蔵経は、経と律を内容とするカンギュルと、論を内容とする  
テンギュルからなり、大品系の『二万五千頌』はその両方に収められ  
ている。カンギュルに収められているこの蔵訳では、四種菩薩を列挙し  
た箇所（236b4-7）に続くこの箇所でも再び四種の菩薩を列挙するのみ  
で、十地などの階位を示す表現は見られない。

⑤蔵訳『二万五千頌（論）』（Ca 75a4-8）

kau shi ka de ni 'di ltar rigs kyi bu dang/ rigs kyi bu mo de dag gis byang  
chub sems dpa' sems dpa' chen po theg pa la gsar du zhugs pa gzhah du  
med grangs med tshad med pa rnams kyi dge ba'i rtsa ba la rjes su yi  
rang bar byas shing bla na med pa yang dag par rdzogs pa'i byang chub  
tu yongs su bsnogs so// sa dang po la gnas pa'i dge ba'i rtsa ba dang/ sa  
gnyis pa la gnas pa rnams kyi dge ba'i rtsa ba dang/ sa gsum pa la gnas  
pa rnams kyi dge ba'i rtsa ba dang/ sa bzhi pa la gnas pa rnams kyi dge  
ba'i rtsa ba dang/ sa bcu pa la gnas pa rnams kyi dge ba'i rtsa ba dang/  
skye ba gcig gis thogs pa'i byang chub sems dpa' sems dpa' chen po  
rnams kyi dge ba'i rtsa ba de dag la rjes su yi rang zhing dge ba'i rtsa ba  
de dag gis rnam par 'phel bas bla na med pa yang dag par rdzogs pa'i  
byang chub dang/ nye bar gyur pa'i phyir ro//

テンギュルに収録されたこの蔵訳は、「初発心」に相当する「theg pa la  
gsar du zhugs pa（新たに乘に進み入った）」が初地の前に置かれ、「skye  
ba gcig gis thogs pa（一生補処）」が十地の後ろに置かれており、四種菩

薩の第一と第四に挟まれる形で十地が置かれている。③の『大般若』と同様の説明である。

⑥梵文『二万五千頌』(PVP V 37.14-22)

tathā hi taiḥ kulaputraih kuladuhitṛbhiś cāsaṃkhyeyānām aprameyānām aparimāṇānām bodhisattvānām mahāsattvānām navayāna-saṃprasthitānām kuśalamūlāny anumoditāny anumodyānuttarāyām samyaksambodhau pariṇāmitāni, prathamabhūmisthitānām kuśalamūlāny anumoditāni, dvitīyabhūmisthitānām yāvad daśabhūmisthitānām yāvad ekajātipratibaddhānām bodhisattvānām mahāsattvānām tāni kuśalamūlāny anumoditāni, taiś ca kuśalamūlair vibaddhamānair anuttarāyāḥ samyaksambodher abhyāsibhavanti.

(すなわち、かの善男子・善女人らによって、数えきれないほどの、量りしえないほどの、量りえないほど多くの、新たに乘に進み入った(初発心)菩薩摩訶薩の善根が随喜され、無上正等覺に廻向された。初地に住する〔菩薩摩訶薩〕の善根が随喜され、第二地に住する〔菩薩摩訶薩〕の、乃至、十地に住する〔菩薩摩訶薩〕の、乃至、一生補処菩薩摩訶薩の善根が随喜された。そして、その解き放たれている諸善根によって、[彼らは] 無上正等覺に近づくことになる)

梵文『二万五千頌』も③『大般若』と⑤藏訳『二万五千頌(論)』と同様に、「初発心」に相当する「新たに乘に進み入った」が初地の前に置かれ、「一生補処」が十地の後ろに置かれている。

さて、以上見てきたように、④ではただ四種菩薩が列挙されるだけであつたが、その他の用例では、四種菩薩が十地と関係づけて論じられていた。③、⑤～⑥の例では、十地の前に四種菩薩の第一が置かれ、十地の後に四種菩薩の第四が置かれている。これらにおいては、四種菩薩が

十地の体系の中に完全に組み込まれたわけではないが、「初発心」や「一生補処」が十地と並んで列挙されていることから、階位とほぼ同様の扱いを受けていることが分かる。

一方、古い訳である①～②では、四種菩薩の四番目（一生補処／阿惟顔）が第十地として示されていた。また、四種菩薩の一番目（初発心）も十地の初地と同一視されていたと理解することができる。さらに、四種菩薩を列挙した後に、第一を初地、第四を第十地に位置づけていることから、四種菩薩の第二、第三はその間に位置づけられていたと考えられる。つまり、第二、第三も十地の階位のいずれか一つ（あるいは複数）に位置づけられていたと考えるのが自然である。

諸異訳の成立順を考慮すると、まず、大品系では四種菩薩は十地に対応する階位として位置づけられるようになり、後に「初発心」と「一生補処」が十地の外に置かれるようになったと解することができよう。

#### 4. どの十地説に組み込まれたか

前章の①～②の用例では、四種菩薩が十地と対応させられていた。ただし、それはいかなる十地かという問いに答えることは、それほど簡単なことではない。というのも、大品系の般若経では、「共の十地」、「不共の十地」、「無名の十地」というように、複数の十地の系統が説かれているからである。四種菩薩はどの系統の十地に組み込まれたのだろうか。まずは、これら三タイプの十地について整理しておきたい。

- (1) 共の十地：声聞、独覚、菩薩を対象とした階位。大品系の經典本文では階位の名称が列挙されるのみで、内容の説明はほとんどなされない。以下に、『大品』におけるこの十地の名称の訳語を示したうえで、参考のため『大品』の注釈書である『大智度論』の説明を括弧内に整理して示すこととする<sup>15)</sup>。

- ①乾慧地(智慧があっても禪定の水が無く乾いた状態。声聞は不浄観、慈悲観、無常観を修し、菩薩は初発心を得る)
- ②性地(声聞は煖法から世間第一法を修し、菩薩は順忍を得る)
- ③八人地(八人とは預流・一來・不還・阿羅漢のそれぞれ向と果に至る者のことで、それらが通る階位とされる。声聞は苦法忍ないし道比智忍を修し、菩薩は無生法忍を得る)
- ④見地(声聞は預流果を得て、菩薩は不退転地に至る)
- ⑤薄地(声聞は預流、あるいは一來として煩惱を断じ、菩薩は不退転地を過ぎるが仏地に至らない)
- ⑥離欲地(声聞は煩惱を離れ不還となり、菩薩は離欲により五神通を得る)
- ⑦已作地(なすべきことがなされた段階。声聞は尽智と無生智を得て阿羅漢となり、菩薩は仏になる)
- ⑧辟支仏地(辟支仏(独覚)の階位)
- ⑨菩薩地(菩薩の階位)
- ⑩仏地(仏陀の階位)<sup>16)</sup>

(2) 不共の十地：菩薩のみを対象とした階位。『十地経』に示される十地と同じものである。『大品』以前の古い訳本には確認されず、『大般若』以後に取り入れられたものである。ただし、その『大般若』等においても階位の名称が列挙されるのみで、内容の説明はなされない。以下に、『大般若』における不共の十地の各名称を示したうえで、参考のため、括弧内に『十地経』に基づく説明を付すことにする。

- ①極喜地(菩薩の決定位に入り、将来成仏することが決定したことを歓喜する)
- ②離垢地(十善業道を修して心の垢をはなれる)
- ③発光地(智慧の光が僅かに明らかになった)

- ④焰慧地（三十七菩提分法を修し、智慧の光が増す）
  - ⑤極難勝地（不退転の心を得て四諦を実践し、衆生を利益するための  
技芸を習得する）
  - ⑥現前地（縁起に通達して、真実の智慧が現前する）
  - ⑦遠行地（方便慧を成就し、二乗を超過し、無生法忍を得る）
  - ⑧不動地（智慧が一步も退転せず、教化すべき衆生に応じて自らの姿  
を変え済度する）
  - ⑨善慧地（大法師となり、自由自在に説法し、衆生を済度する）
  - ⑩法雲地（一切智を得て、法の雨を降らす）<sup>17)</sup>
- (3) 無名の十地：菩薩のみを対象とした階位。『大品』『発趣品』（『放光』  
「治地品」、『光讚』「十住品」など）でまとまって説明されている。  
「初地」「二地」というように階位の番号を述べるだけで、階位の名  
称は示されない。ただし、経典本文内で、それぞれの階位で修すべ  
き行の内容は説明されている。主に『大品』における記述に基づき  
ながら、それらの内容を括弧内に整理して示しておく。
- ①初地（深心堅固、親近善知識、求法など、十事を行ずる）
  - ②二地（戒清浄など、八法を念じる）
  - ③三地（多学問無厭足など、五法を行ずる）
  - ④四地（不捨阿蘭若住处など、十法を行ずる）
  - ⑤五地（遠離親白衣など、十二法を遠離する）
  - ⑥六地（六法、すなわち六波羅蜜を具足し、不作声聞辟支仏意など、  
六法を満たす）
  - ⑦七地（不著我などをなし、二十法を遠離し、具足空、無生法忍など、  
二十法を具足する）
  - ⑧八地（順入衆生心、遊戯諸神通など、五法を具足し、また知上下諸  
根、浄仏国土など、五法を具足する）

- ⑨九地（受無辺世界所度之分、菩薩得如所願など、十二法を具足する）  
⑩十地（『大品』『放光』は、この階梯で具足すべき法を説かないが、『光讚』は「清淨具足一切名徳」など、この地で修めるべき十二の徳目について説いている。また、十地（十住）菩薩について、『大品』は「仏の如し」と見ているが、『放光』は「如来」、『光讚』は「仏」と見ている。）<sup>18)</sup>

これら三タイプの十地説のうち、『大般若』以後に導入された(2)「不共の十地」が候補から外される。それより前の訳である『放光』『大品』における十地を説明するものとはなりえないからである。また、「初発心」を十地の第一とし、「一生補処」を第十とするという四種菩薩と十地の関わり方を考慮すると、それは菩薩のみを対象とした十地説であるということになる。だとすると、声聞や独覚の階位を含む(1)「共の十地」も候補から外され、四種菩薩が組み込まれたのは(3)「無名の十地」ということになる。

『大品』『発趣品』における「無名の十地」の説明について論じた小沢憲珠は<sup>19)</sup>、「無名の十地」の初地の修行項目として説かれる「親近善知識」と「求法」は、『大品』全体においては新学の菩薩のまずなすべきことであることなどから「この初地中には発心の語が出ないが、この初地は菩薩の発心地とみてよさそうである」と述べる。

また、八地の修行項目として説かれる「遊戯諸神通」や「浄仏国土」は『大品』全体では不退転以後の菩薩がなすこととして説かれていることを指摘している。

さらに、十地の説明では第十地の菩薩が「如仏」とされていることを指摘している。「一生補処」や「阿惟顔」は仏ではないが仏に限りなく近づいているので「如仏」と表現されてもおかしくない<sup>20)</sup>。

これらの説明を踏まえると、四種菩薩の「初発心」「一生補処」は、そ

れぞれ「無名の十地」の「初地」「十地」に対応していると考えることができる。また、小沢憲珠は「八地」について「不退転」以降の菩薩としていたが、「発趣品」の説明の中に、「七地」において無生法忍を得ることが述べられており、また同じ『大品』に「阿惟越致（不退転）」菩薩が無生法忍を得ているという記述（是阿惟越致菩薩摩訶薩，以是自相空法，入菩薩位，得無生法忍）（『大品』341b1-2）があることから、「不退転」に相当するのは「七地」であると考えられる。

また、小沢憲珠が言及しなかった「久修習」については、「不退転」に相当する「七地」より前と考えることができる。『大品』『発趣品』の説明では、「六地」で六波羅蜜を具足することになっている。同じ『大品』に、「久発意（久修習）」の菩薩が六波羅蜜を行じているという記述（是菩薩摩訶薩久発意行六波羅蜜多，供養諸仏）（『大品』314c25-26）があるため、「久修習」に相当するのは「六地」であると考えられる。

以上のように、『大品』『発趣品』における「無名の十地」の内容説明は、四種菩薩のそれぞれを示す階位を含んでおり、四種菩薩が「無名の十地」の中に位置づけられたという見方を支持している。

## 5. おわりに

以上、概観してきたように、小品系においては四種菩薩のうち「不退転」のみが階位として明確に確立していたが、大品系になると四種それぞれが階位として、「無名の十地」の中に位置づけられるようになった。この四種菩薩が他の修行階梯とどのように関係しているのかという点については、今後の検討課題としたい。

### 《使用テキスト》

ASP: *Aṣṭasāhasrikā prajñāpāramitā, Abhisamayālaṅkāraḥ Prajñāpāramitāvyaḥyā The Work of Haribhadra*, ed. U. Wogihara, Tokyo, 1932-35

(7vols), repr. Tokyo, 1973.

PSP : *Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā*, Part 1-8, ed. T. Kimura,

Tokyo, 1986-2009 (6vols).

『道行』：『道行般若經』大正 No.224.

『放光』：『放光般若經』大正 No.221.

『光讚』：『光讚經』大正 No.222.

『大品』：『摩訶般若波羅蜜經』大正 No.223.

『大般若』：『大般若波羅蜜多經』大正 No.220.

藏訳『二万五千頌（經）』：*Shes rab kyi pha rol tu phyin pa stong phrag nyi shu lnga pa*, P No.731.

藏訳『二万五千頌（論）』：*Shes rab kyi pha rol tu phyin pa stong phrag nyi shu lnga pa*, P No.5188.

『大智度論』：『大智度論』大正 No.1509.

#### 《参考文献》

小沢憲珠 [1988] 「『大品般若經』の十地説」、『仏教文化研究』33, pp.95-116.

梶山雄一 [1983] 「般若思想の生成」、『講座大乘仏教2 般若思想』、東京：春秋社、pp.1-86.

梶芳光運 [1980] 『大乘仏教の成立史的研究』、東京：山喜房仏書林。（『原始般若經の研究』、東京：山喜房仏書林、1944 を増補改題）

岸 一英 [1976] 「小品系般若經における菩薩の階位の発達」、『印度学仏教学研究』24-2、pp.668-669.

鈴木健太 [2010] 「『八千頌般若經』における菩薩の階位について」、『印度哲学仏教学』25、pp.43-57.

[2014] 「『八千頌般若經』における四種菩薩再考」、『武蔵野大学通信教育部 人間学研究論集』3、pp.13-25.

平川 彰 [1974] 『インド仏教史 上巻』、東京：春秋社.

[1989a] 『初期大乘と法華思想』、東京：春秋社.

[1989b] 『初期大乘仏教の研究 I』、東京：春秋社.

宮崎展昌 [2015] 「二種の十地とその階梯」、『般若經大全』、東京：春秋社、  
pp.239-244.

山田龍城 [1959] 『大乘仏教成立論序説』、京都：平楽寺書店。

- 1) 梶山雄一 [1983]、平川彰 [1989b] など。
- 2) 以下に示すのは、小品系の梵文『八千頌』（荻原本）の、下線部にあたる箇所だが、同刊本が欠いていた語句をサンスクリット写本で確認し、括弧 [ ] で補った (cf. 鈴木健太 [2010] pp.44-45)。ASP p.831.10-15:  
yas teṣāṃ bhagavan prathamayānasamprasthitānāṃ bodhisattvānāṃ  
mahāsattvānāṃ cittotpādān anumodate [caratām api bodhisatvacaryān  
tāmś cittotpādān anumodate (caryāpratipannānām api tāmś cittotpādān  
anumodate)] 'vinivartaniyānām apy avinivartaniyadharmatām anu-  
motate ekajātipratibaddhānām api bodhisattvānāṃ mahāsattvānām ekajāti-  
pratibaddhadharmatām anumotate kiyat sa bhagavan kulaputro vā  
kuladuhitā vā bahutaraṃ puṇyaṃ prasavati//
- 3) ASP pp.829.12-832.18.
- 4) 鈴木健太 [2010] 参照。
- 5) 理由の①～④については、既に鈴木健太 [2014] で簡単に触れている。
- 6) 例えば梵文『八千頌』には「avinivartaniyām bodhisattvabhūmau (ASP 46.5, 690.17)」という表現が見られるが、「不退転」以外の三種については、そのような表現がなされることはない。また、『道行』には「阿惟越致地（「不退転地」の古い訳し方）」という表現が7か所（432b8, 455a7, 455a12, 456a13, 467c15, 467c25, 470a8）、「阿惟越致道地」が1か所（467c20）見られるが、他の三種については「地」という言葉をつけて表現することはない。
- 7) ASP 213.16-214.27, 820.17-824.4. 鈴木健太 [2010] pp.52-54 参照。
- 8) 鈴木健太 [2014] p.24 参照。
- 9) 鈴木健太 [2010] p.45 参照。
- 10) 平川彰 [1989b] p.412.

- 11) 山田龍城 [1959] p.215、平川彰 [1989b] p.417 参照。
- 12) 本稿第2章で紹介した小品系の文章とほぼ同じものが大品系にも見られる(『放光』101c22-27、『大品』358c9-14、『大般若』302a5-11、藏訳『二万五千頌(経)』236b4-7、藏訳『二万五千頌(論)』73b6-74a1、PSP V 36.7-12)。
- 13) 大品系では、訳語の点で「十住」と「十地」が互用されることがある(平川彰 [1989b] p.454 参照)。この箇所も「十地」の意味で「十住」と述べていると理解できる。
- 14) 平川彰は「最後の灌頂位 (= 阿惟顔) は、王子は灌頂の儀式をすることによって、国王の位に即くのであるから、阿惟顔と一生補処とはほぼ同じ内容のものともみてよい」(平川彰 [1989b] p.403) と述べている。
- 15) 以下に示す『大智度論』の説明に従い、菩薩が乾慧地から一段ずつ上がってくるとすると、第七地の已作地において仏になることになり、第八地以降が不要となってしまう(平川彰 [1989b] p.480 参照)。このように『大智度論』の説明も熟したものとは言い難い。
- 16) 『大智度論』585c25-586b6、平川彰 [1974] pp.391-392、平川彰 [1974b] pp.476-481、宮崎展昌 [2015] pp.240-241 参照。
- 17) 平川彰 [1974] pp.393-394、平川彰 [1989a] pp.191-202、宮崎展昌 [2015] pp.242-243 参照。
- 18) 平川彰 [1989b] pp.465-466、小沢憲珠 [1988] pp.105-111 参照。
- 19) 小沢憲珠 [1988] pp.105-113 参照。
- 20) 『大品』のいう「仏の如し」が、四種菩薩の第四である「一生補処／阿惟顔」の説明となり得ることは直ちに理解することができる。しかし、『放光』は「十住菩薩摩訶薩当名之為如来」(27c29-30)、『光讚』は「第十菩薩摩訶薩者即謂是仏」(197a13-14) としており、一見したところ、その説明が菩薩である「一生補処／阿惟顔」に当てはまるとは解し難い。平川彰もこの点について、「十住の第十位が「阿惟顔」であることは、十住は如来までであるという主張と、若干合致しない点があろう。阿惟顔は「灌頂」であるから、この儀式をなして世俗の王が王位に即くわけである。

したがって灌頂の儀式の時には、まだ完全な王とはなっていないわけである。その意味では、灌頂をもって仏陀の位を示すのは、適切でない点があろう」（平川彰 [1989b] p.475）と疑問を呈している。『放光』は第十位を一方では「阿惟顔」とし、一方では「如来」としていた。どちらかの記述が誤りなのか、あるいは「阿惟顔」を菩薩の階位の到達点に至った者、すなわち王位（仏・如来）に至った者を示す言葉というように理解していたのか、あるいはその他の事情によるのか、その理由は定かではない。本稿では、ひとまず『大品』の説明に従いながら論を進めることとする。

